

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 なかじま しんや
中嶋 真也

本論文は、『万葉集』を、表現と享受の観点から考究しようとする論である。『万葉集』の研究は一千年を越える歴史をもっており、それゆえにその表現の考察は、享受の様相の究明とつねに不可分な関係にある。本論文は、その表現と享受の問題をいくつかの具体例を通じて解き明かし、今後の研究にとって大きな示唆を与える内容になっている。全三章からなり、さらに序・跋を付す。第一章「都と離宮」、第二章「景物と表現」が表現の観点からの、第三章「仙覚と享受」が享受の観点からの論になる。以下、本論文が明らかにしえた知見を、各章ごとに要約して示す。

第一章「都と離宮」は、都と離宮を歌う歌の表現性を、享受史を踏まえた精細な読みを通じてあきらかにした。小野老の「あをによし奈良の都は咲く花のにはほふがごとく今盛りなり」の歌においては、「咲く花のにはほふがごとく」の表現が、当時としては異例であることを示す。また、人麻呂の近江旧都を懐古する歌の「心もしのに」の句について、従来の説を批判・検討し、「心も乱れるほどに」の意であることを導き出している。さらに、笠金村の吉野離宮への行幸従駕歌について、柿本人麻呂の単なる模倣ではない新しさがあることを具体的に実証している。いずれも卓見であり、裨益するところが少なくない。

第二章「景物と表現」は、「月と譬喩」の論が卓論である。満誓沙弥の「見えずとも誰恋ひざらめ山のはにいさよふ月をよそに見てしか」の歌の「月」は、これまで深窓の令嬢の譬喩と解されて来たが、「月」の性が基本的に男であり、「山のはにいさよふ月」は、男を待ち迎える女の類型的発想による表現であることをあきらかにして、満誓が女の立場を装った戯歌であったことを説く。新たな理解を示したもので、きわめて説得性が高い。

「ちどり」と「かはづ」の論では、この二つの景物がどのように表現されて来たかを、八代集にまで視野を広げて考察する。その上で、『万葉集』の「ちどり」が、懐旧の情を刺激することで過去へ、「かはづ」が、大君への永続的な奉仕を通じて未来への指向をもつことを具体例を通じてあきらかにする。これも新見の提示であり、注目に値する。

第三章「仙覚と享受」は、仙覚の『万葉集註釈』の丹念な分析にもとづく三つの論からなる。「仙覚の知」では、『万葉集註釈』における『奥義抄』『五代集歌枕』の引用状況の丁寧な確認を行い、「仙覚と歌学」では、『万葉集註釈』の引く「或(有)抄」が何を指すのかを具体的に考察する。その上で、六条家歌学の影響が濃いことを指摘する。仙覚の『万葉集』校訂作業のありかたを探るきわめて有益な基礎作業であり、その成果は高く評価しうる。また「仙覚と六条家万葉集」では、仙覚の校訂作業を、『万葉集註釈』に引用される「六条家本万葉集(二条院御本)」の検討を通じて具体的にあきらかにし、仙覚の万葉学の背後に藤原清輔の存在がつつよく認められることを実証した。これまた重要な基礎作業であり、その検討はまことに労作の名に値するといえる。

このように、表現と享受という観点から『万葉集』研究に挑んだ本論文は、いくつかの新見を提示するなど秀れた成果を示しており、『万葉集』の全貌を闡明するにはなお不十分な点が残るものの、その内容は高く評価しうる。よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。